

# 中川根ふる里通信 = 第68号 =

中川根ふる里通信  
昭和61年4月20日創刊  
編集・発行・連絡先  
〒428-0313  
静岡県榛原郡中川根町上長尾  
TEL. 0547-52-0015 859-6  
郵便振替口座 00870-4-81556



“輝きの時はいま”  
勝下哲明君  
(高郷出身)

“おめでとう”  
日本代表となって  
第6回国際  
アビリンピック  
インド大会出場  
コンピューター組立部門



身体の手助けを乗り越え、世界の晴れ舞台へ!

写真上、坂口厚生労働大臣より激励を受けている勝下君。  
写真右、壮行会のスタッフ。女性は 坂本元静岡県副知事。 2面に続く

## 平成十六年明けまして

## おめでとうございませう

年度が変わって初めての便りが、とてもうれしい話題となりまゝに。

中川根町出身の勝下哲明君(二十九歳)が、日本の代表となつて、第六回国際アビリンピック・インド大会(平成十五年十一月二十三日から七日間)に「コンピュータ組立部門」の選手として出場し、優秀な成績を納められました。本当におめでとうございませう。

国際アビリンピックとは、障害のある方が、世界各国から集まり、日頃鍛えた職業技能を競うほか、国際会議・技能デモンストレーション、障害者支援機器の展示などを行う大会で、今回は世界三十三の国と地域から参加があつたという事です。

勝下君は、小さい頃から元気が子で、スポーツ万能でしたが、十七歳の春、交通事故で脊髄損傷、命はとりとめず、だが下半身マヒという大きな障害を負うことになりました。多感な年齢、とすれば荒む心を、本人の頑張りとご家族の献身で、進路を開いて行かれたのではないかと思います。スポーツ万能だった事から、車椅子バスケット等も、上達していったという事です。

何年か前、専門技術を身に付ける為、名古屋の職業訓練学校に入学しました。本来細かい事が好きだった事もあり、パソコンには頭角を表し、はじめて一年位いで、障害者技能競技大会に出場できるようになりました。

第25回全国障害者技能競技大会(平成十三年十月)が千葉県で開かれ、勝下君は愛知県代表として、インターネット



ホームページ作成部門で、見事金賞を受賞されました。この様は実績を重ね、大きく世界へ羽ばたくことになったのでしよう。お蔭に先立って、十月二十日には皇太子殿下、妃殿下にも謁見され、国の選手団壮行会も行われました。今、一月二十日には県方に賞状をいただきに行くらしいのよと、話されるお母さん、息子さんの快挙を一番喜んだのは、ご両親だろうと思えました。

勝下君は、現在、椋南の東洋製缶・静岡工場に勤務されていて、椋原町にお住まいです。今後の活躍を期待します。

世界大会で、コンピューターを組立てている所、をアビリンピック・インド大会の模様は、テレビ朝日系で放映されました。ご覧になった方もあられぬのではと考へます。

# お茶あれこれ—第五回—

## 詩歌に現れたお茶

静岡市 石塚 幸男

十五 なに巨くよくよ お晩の茶もみ

月にあの子もとろりあの子も 採みに来る(十六省略)

十七 やつこもつこよ お茶の前で

こっちやお抹茶 あっちやお抹茶 はりこんぼ

何の歌だろう、とい首をかしげる向きも多いただろう。ところがこの後に「ちやつきりちやつきりちやつきりよ／＼きやあるが鳴くんで雨すうよ」と続けると、「あー『ちやつきり節』か」とうなずくはず。そう、北原白秋作詞、町田嘉章作曲の『ちやつきり節』の一節である。歌詞中「はりこんぼ」は「よい抹茶を張り込んでやろうか」の意。

ちなみに、ちやつきり節の歌詞中、茶という言葉は圧倒的に多いのはもちろんだが、静岡方言を拾ってみると「雨すうよ」を筆頭に「行かすか(行こうか)」、「おまうち(あんたたち)」、「茶んぶくろ(茶ぶくろ)」、「はなに出た(端にでた)」、「えれえれ(選れ選れ)」、「お茶を選ぶ」、「せせっばい(せいせい)」……のごとく見事に静岡方言の特徴を把握し、採択している(これについては後述)。

静岡電鉄(現、静岡鉄道)が、大正十五年、「狐ヶ崎遊園地」を建設した際に、その開園記念に、コマースルソングを企画、詩壇の大御所北原白秋に作詞を依頼した。何度か断られたが、静鉄の熱意に負けて、ついにOKした。

昭和二年に来静した北原白秋は、静岡の人情、風俗、方言(前述)、茶のすべてをいろいろの人々から吸収して、詩作に

当たったといわれる。ところが傍目には、彼は料亭で飲んでばかりいたように映り、やきもきさせた。しばしばきりして、おそるおそる、催促した。すぐできるよ、と言つてまもなく三十節にもなる『ちやつきり節』を示したという。

「きやあるが鳴くんで雨すうよ」は、たまたま山松楼(蓬茶楼ともいわれている)という料亭で老芸妓が窓を開け、もらした一語がヒントとなったと言われる。

草稿(静鉄に社室として保管)には「きやあるがなくから……」と記されているとのこと。後で、静岡出身の作家長田恒雄が白秋に「静岡ではなくんてと言ふのですよ」と教えたところ、白秋は「なくんて」と改めたらしい。今では「鳴くんで」と歌われているのは、大方、こぼれだつたろう。

さて、この「ちやつきり」という言葉であるが、もちろん「茶ばさみ」の音である。今茶ばさみは、省力化のために、動力摘採機が主流になって絶滅しているだろうと思つたが、いやいやさにあらず、ずぶとく生き残っているそうだが。

『中川根ふる里通信』編集長小沢節子さんによれば、たとえは急な傾斜地などの、人の届きにくいところの摘採や手摘みしたあとのならしなどに使われているとのこと。「やきしやき」と聞こえるそうだが、何か郷愁をそよめられる音である。ここで、作曲の町田嘉章について触れておこう。

この歌の作曲は北原白秋が直接依頼したという。東京美術学校(東京芸大)の図案科出身という、変わり種で、戦後ながくラジオの邦楽・民謡番組の解説者として活躍していたことは記憶の方もいるだろう。

まことに『ちやつきり節』は作詞・作曲ともに人を得ている。しかし、この新民謡も、作られてからしばらくは、目の目を見ず、地元の芸者たちが歌っていただけだったが、昭和五年ラ



ジオ放送されるや全国に知られ、昭和六年にレコードが発売され、  
て全国的にヒットしたのである。

日本平にこの歌碑があるが、泉下に眠る白秋も、この歌が「ご当地ソング」の嚆矢として、今でも広く口ずさまれていることを知れば、もって瞑すべしである。

「唄はちやっきり節男は次郎長、花はたちばな夏はたちはな茶のかおり(ちやっきりちやっきりちやっきりよ、キヤあるが鳴くんで雨すらよ」と歌うと、茶産地静岡の表情が彷彿と浮かんでくるだろう。

北原白秋には

あなかやか父と母とは朝の雪  
ながめてぞおはす茶を湧かしつつ

という香歌があるのに触れておこう。これは、父母が茶を湧かしながら、朝の雪景色を見ているというのである。淡々と二人の挙措とお茶の日常性が重っていて、日常茶飯事という言葉の源流的意味までも感じさせる。

詩人三好達治にも日本平で詠んだ詩があることは、案外知られていない。

お茶の木

お茶の木茶の木 お茶畑  
日本平は海の上  
清水港に白い船見え  
ちやっちやと茶鉢茶摘み娘がならした  
茶鉢茶摘み唄茶摘み娘がうたった  
お茶の木茶の木を摘んで

茶坊主がよろつた  
茶畑  
茶畑

一読、童謡風。「日本平は海の上」は見事な表現である。実際、ミカン畑や茶畑を縫って登りきると、日本平の景観はこの詩のごとくである。「ちや」の繰り返しがなんとも楽しい。ここでも、「ちやっきり節」と同様「茶ばさみ」が効果的に使われている。まさしく二面の茶畑が眼下に広がっている観。三好達治には、次の詩もある

茶の花十里

牧の原 茶の花十里  
露じもにぬれて咲く日は  
茶畑は雨のすみし日あと  
何を見んとて咲く花か  
刈りつめられし丘の波  
そのうねを出てまた波に入る  
ちんちろ  
しべ長く花粉豊か  
葉がくれに  
牧の原 茶の花十里

牧の原は、一市(島田)八町(金谷・榛原・吉田・相良・御前崎・菊川・小笠・浜岡)にわたる日本最大の茶園である。

一望約5000ヘクタールに及ぶ。東京ドーム約1000個はすっぽり入る勘定である。

この詩は、そんな広さの中に可憐な茶の花を点綴させている。いわば、巨視的な眺望と微視的な茶の花を対比させたところに冴えが見られる。

「茶の花」は、植物学的にいえば「白色五弁花、少数の漿果(二枚以上の心皮からなる子房で、成熟すると果皮が乾燥し、縦に開裂して種子を出す)をつける」で、俳句では冬の季語である。

「茶の花のわづかに黄なる夕かな」(蕪村)や「茶の花に朝日冷たき畑かな」(虚子)などの句がある。

牧の原の一角に中茶景昭の像が、牧の原を眺めるように堂々と立っている。中茶以下大草高重、松岡萬、関口隆吉ら開拓幹部に率いられた旧幕臣たち約四百名が入植したのは明治二年であった。彼らは刀を鍬に持ちかえ、荒野を開墾していき、明治十年には開墾地五〇〇町歩に達し、今日の牧の原茶園の基礎を築いた。お茶を選んだことについては、政大石貞男氏は類推の域を免れないが、として①当時、農作物のなかで輸出を中心に茶がはなばなしく登場してきたこと。②開拓決定の主要人物である勝海舟は、茶が輸出産物として有望であることを知っていたこと。③中茶、松岡、関口らは静岡にはすでに茶の間屋があることとや本山や川根、森などの茶産地が形成されていることを知っていたこと、なども挙げている(牧之原開拓史考)。

いずれにせよ、茶を選んだことは今日の隆盛を見ればまさしく卓見と言うべきだろう。

さて、今度は静岡市羽鳥に筆を移そう。羽鳥と言えは、珠玉の名作『銀の匙』の著者中勘助である。

彼は戦中戦後(昭和十八年三月)羽鳥に住んだ。転地静養のはずがそのまま疎開になったのである。

羽鳥界隈の素朴な人たちと美しい自然に、彼はいたく惹かれていたことは、多くの随筆、詩、短歌、俳句を残したことを見れば想像に難くない。

はとり茶どこよ 蜜柑どこ  
山にや 黄金の鈴がなる  
ほんによいとこ 酒もある  
蕪に大根さつまのさかな  
梅干し茶漬けでさびさびと  
うはばみみたいに飯をくふ

随筆『樟ヶ谷』の一節である。昭和十八年十月、当時の服織村新聞樟ヶ谷に転地静養にやってきました。この詩に見られるような美しく、食べ物に豊かな里は、親切な村人とともに、彼の詩蕪の泉を滾々と溢れさせていった。「ほんによいとこ」で「茶漬けを」「うはばみ」のように食らう詩人の姿はユーモラスでさえある。

山里の茶の花さきぬ露ながら さびしき人の魂にぞなへん  
初まき茶つみ麦かり初夏のはとりはせはし 葉おる音  
薬科や若葉かがよふ初夏のはとりはうれし新茶のかきり  
奥ふかく暗き家なみつばくらめ さ月茶町は焙炒のかきり

四首とも『樟ヶ谷』に載っているお茶の短歌である。寂しい時も嬉しい時も羽鳥や茶町など界隈は、彼の詩情をかきたてている。三首目「薬科や…」は二首目「初を…」の次に「暮れぐれにこれを書いてみるところへ一天さんが新茶をもつてきてくれた。湯をわかつて賞味する」とあって、この歌が出ている。

村人たちとの交流がしのはれ、茶は彼と村人たちとの重要ななかだちとなっていることが分かる。

さ月はとりに

さ月はとりは茶つみのさかり  
 山は蜜柑の花ざかり  
 風がさそへば里までにはほふ  
 みんなみな月田植のさかり  
 野らは娘の花ざかり  
 つづやはたちは嫁入りざかり  
 つめやたんほほ蓮花草  
 刈れや鎌もつて大麦小麦  
 恋のひとすぢ矢羽根むぎ  
 かるは黄金ようゑるは緑  
 かはい白妙頬かむり

詩集『薬科』の一節である。のどかな田園風景、茶、蜜柑、働く娘たち……と羽鳥はあにかも古代中国のユートピア「桃花源」のようだ

わがうゑし 芽ばえ茶の花さきにけり

あらかはいお茶のこの花

という歌も『薬科』の中にある。中勘助はお茶を植えて、赤子のように賞でていたことが分かる。

彼はこの地を「麦がのび、菜の花そら豆の花がさき、まはりの山のうへにえひみたいな雲が漂ふやうになつた。この山のいつとなく潤ひをおびてきた繁みに鶯がなまきのこり、田には蛙の唄がきこえる。」(樟ヶ谷)と満喫しているのである。

そして、お茶については



中茶景昭 (ちゅうぢやけいしやう) (1827~1896)

1868年、江戸城無血開城ののち、徳川慶喜は水戸へ退去せり。これを警護して精銳隊頭中茶景昭、大草高直、遊撃隊頭高橋泥舟らの兩隊士2百余人がこれに従った。後同隊は駿河に移り、徳川を警護。  
 1869年、金谷開墾御用を拝命、開墾方頭と成り、2百餘世帯が牧之原に移住  
 1871年、廢藩置縣が断行され、中茶は神奈川県令(県知事)を拝命され、この間、牧之原開拓と士族殖産のために身を捧げ、基礎は島田本陣の種用院。

桐の花茶つみの人も眠げなり  
 若葉して命めでたき新茶かな  
 琴の音もそふや手越の茶つみ唄

(随筆『羽鳥』)

の佳句を残している。  
 まさに羽鳥界隈の茶と蜜柑と村人は、八十年の生涯のうち、四年半ではあるが、彼にとっては「オアシス」(『中勘助全集』第九巻あとがき)であり、また「オアシスの友」(同)でもあり、まさしく黄金のひとときをもたらしたのである。



# 大井川の清流を考ふる 第五回

## 大井川を見つめて八十年

### 山田 部

前号で源流の大井川本川から電力会社による取水(4.5リットル)が、二軒小屋地点で行われて、田代ダムの貯水と田代川第一発電所を経て、水は富山川へ流されている状況を、ご紹介しよう。だが、ご理解いただけたでしょうか。

大井川は二軒小屋からさらに流下して木賊の水門から赤石沢川に導水され、赤石沢川他の水と合わせ赤石ダムを下って畑籾ダム(第一)第三を経て井川ダムで貯水し、多目的ダムの長島ダムの貯水を経て、大井川ダムを下って土本地点で光岳を源とする本川最大の支流寸又川と合流し駿河湾に向って流下しますが、お手元のふる里通信(号)に掲載した図表のとおり、大井川の水は山の中を発電用の導水トンネルを通過して川口発電所(島田市)に送られます。

さて、予告のとおり皆さんを寸又川へご案内します。

### 点描(その三)秘境寸又川と電源開発を探る

はじめに申し上げておきますことは、私自身、大井川の本川(源流から海岸域まで)については踏査しているので、その全容は把握しています。寸又川最大の支流寸又川については未知でありました。

寸又川流域の千頭山全域は、かつて千頭営林署の所管であり、現在は静岡森林管理署の管理下にあります。交通路も旧営林署の森林軌道敷の跡を利用してあり、溪谷の断崖を車で走ることには危険を伴い、入山はおろか寸又川探訪はあきらめるほかない(但し、歩いての探訪なら可能だが、距離的にも時間的にも許されず)。管理者の通行止の施設もあり許可を必要とする)と思惑していた矢先に、寸又峡温泉の翠紅苑望月恒一氏のご好意により、寸

又川探訪のご案内を賜ったものを記述し、合せて水系の電源開発のあゆみと歴史的事実を知って戴きたいと存じます。

寸又川は南アルプス南端である光岳(2,591m)に發し、その南西部と寸又川源流部は、本州唯一の原生自然環境保全地域に指定され針葉樹と広葉樹の混合林が広がる秋境地域です。

光岳の西方に登源した寸又川は、大井川本川との合流地点(土本)まで約30kmを東南に流れる必従谷(その地域の自然の傾斜に従って高い所から低い所に流れること)と、これに直角に結ばれるような適従谷(地層の弱いところや走行断層などに沿って流れること)とに分かれて流れているのが特徴であり、千頭堰堤までは谷も深くなく、清流が岩をかむような早瀬や、碧潭(うち)が緑や紅葉の木々を写す淵の連続であった。千頭堰堤下流は急に谷が深くなっていて、いわゆる寸又峡を現出し、かつて国有林から伐木の搬出をうけた森林軌道から深谷の清流を俯瞰した眺めは、まことに壯観であつたらうと想像されるが、現在は

ダムによって貯水され、大雨のときの放流のとき、昔の溪谷の姿は見られない。

### 西南から

支流の大間川が注ぎ込む付近は名所が多く、旧森林軌道の鉄橋、飛竜橋は谷底から右=寸又川の上流、昭和40年頃まで大根沢方面へ行く森林軌道、天地吊橋付近。下=千頭堰堤には、寸又川堆砂の状態と流木、右の人か望月さん、天地吊橋付近、溪谷を想像させている



谷底からうさ80mの高さに架かって、新緑や紅葉に映える朱色の橋は、夢のかけ橋の観を呈しており、近隣には集落も点在していた。

その近くに湯治場として湯山温泉があり、赤石山中唯一の温泉を誇ったが、発電所と導水トンネル掘削の犠牲となって衰滅したが、40数年前、その付近の溪間に温泉の徴があるので、掘り下げて見ると、温泉が湧出し、露天風呂と小屋を作った林業関係者の憩の天国となった。昭和32年ボーリングによって、深さ96m、温度43.5度、毎分540リットルの温泉が噴出し、ここから4kmをパイプで山間の主邑大間に導き、地元の温泉旅館と県営の山の家を建て、奥泉から林道にバスを走らせ、浴客の招致をはじめた。これが現在の美女づくりの湯寸又峽温泉のはじまりです。

国土地理院の五万分の一の地図で大間地区を見ると、古代の寸又川は、大間集落の谷合を流れて、北に向をかえて再び現寸又川に流出したもので、曲流部が切断された後に、土地の隆起がおこったので、その当時の寸又川は深く河床を掘って、現在の集落よりも120m以上深い谷を流れている。そして集落の東にある海拔660m程の環流丘陵は(外森山)、北方朝日岳から伸びてきた山脚を寸又川が切ったもので、この辺から東北東の接岬岬(大井川)にかけて、いかに大地の隆起がはげしかったか、地球生成の歴史を物語っています。



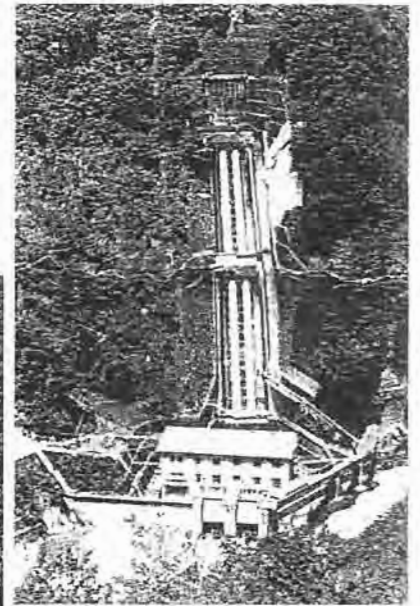
※寸又川を含む大井川流域の電源開発のあゆみをたどることにします。

大井川の電源開発はイギリス人技術者の調査による三つの計画のうち、牛の首計画が流域第一号として明治43年に日英水電協定によって小山発電所(出力400KW)として実現し、同年に東海紙料(現東海パルプ)の地名発電所(出力250KW)が完成する。これに続いて先号で紹介した、大井川源流二軒小屋取水の東京電力(株)の田代川第二第一発電所が、山梨県早川への導水によって昭和2年に完成しました。

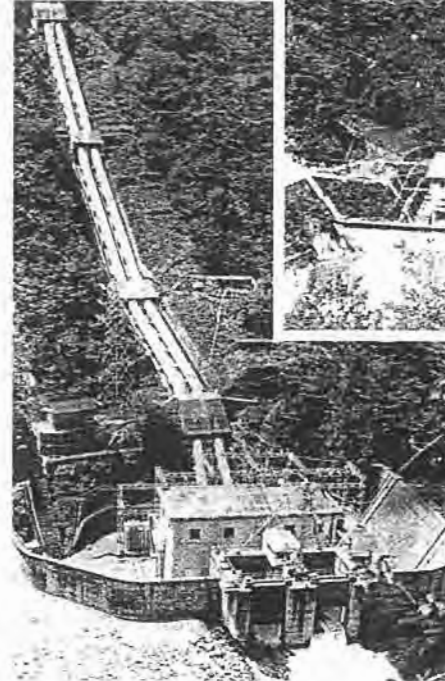
この頃、大井川流域の山林資源の搬出と、人的物的な輸送手段として大井川鉄道の布設工事が大正15年から始まり、昭和6年12月に金谷ー千頭間が全通しました。鉄道の開通は、電源開発に拍車をかけることになり、大井川水系第三番目の開発は、寸又川に第二富士電力(富士新橋系)による湯山発電所(出力22,200KW)の建設計画がなされ、寸又川の源流からの水を千頭ダムで貯水し、平ノ沢や大間川の水を合わせ導水トンネルで湯山発電所に送るもので、昭和7年8月に着工し、昭和10年10月に完成するのであります。資材の輸送は大井川鉄道と既に稼働中の川根電力索道によって行われました。

昭和11年10月、富士電力は湯山発電所の利水を導いて大間ダムに貯水し導水する大間発電所(出力3,200KW)が着工し、昭和13年12月に完成しました。その後、前記二発電所は、河岸に建設されてあった為、洪水によって





大間発電所→  
下流に寸又川ダムが  
建設されたために、  
河床が上がり、浸水。  
現在は当所に  
地下発電所が施  
置されている。



← 湯山発電所。  
下流の大間ダムに  
より、河床がのり  
水没。現在、強護  
は防水壁がほと  
こされている。そ  
の昔は、大間ダムから湯  
山発電所へはダム  
湖に舟を浮かべて  
湖船を利用したとさう。

水没被害にあり、湯山発電所は防水壁をめぐらせ、大間発電所は送水管も発電所も地中に設置されています。

この間、大井川鉄道の全通を待つかのように、昭和6年、大井川電力(株)によって、当時流域最大の出力を有する大井川発電所(出力68,200KW)が本川根町崎平池内への建設計画が発表されるのであります。その計画の大きさは、大井川本川を本川根町市代で又切り貯水する大井川ダムの建設と、その貯水を導水トンネルで寸又川ダムに送り、寸又川の水を合せ、更に横沢川の水を集めて下流の崎平まで導水し、落差(1,273m)を求めて、使用水量72.5万、水路延長9,072mという内容であり、当時の大井川は、森林資源の木材の搬出に川狩りという方法を採用し、原木を所用の長さに切つて、大井川の水の流れに乗せて、川狩り人夫の手で島田の貯木場まで搬送するのが、当時の輸送方法でありました。川を堰止めるダムが出来た場合、木材はここでストップされ、流

下は不可能となるために、大井川木材川狩組合及び大井川木材同業組合との間に、流木権の補償問題が発生したのであります。大井川の流れに身をまかせながら、木材を流し、島田まで流送することを、仕事としてきた彼らにとっては、生活を根底からくつがえす大問題なのであり、木材業者にとつても死活問題でありました。

静岡県知事は、大井川ダムの建設許可にあつて、電力会社に次の四項目の条件を示して両者の斡旋にのりだしました。

- 一、大井川ダム(奥泉・市代)の地点から発電所放水口までの約20km区間に、運材設備をつくること。
- 二、運材設備の工事費および維持修繕費を負担すること。
- 三、運材者に設備使用料など請求しないこと。
- 四、運材設備をこわされても賠償は請求しないこと。

この条件は、木材業者や川狩人夫にとっては、有利な条件であり、大井川電力(株)にとっては不利な条件であった。にもかかわらず、大井川木材同業組合と、大井川川狩組合は、さらに細部にわたつて条件をつけて要求した。大井川電力(株)にとっては厳しい条件ではあったが、発電所(崎平)は完成しているため、すべての条件を全面的に受け入れた。

これは大井川の変貌を見るうえからも、また現在の水利権問題を考える点からも重要な視点となるので、木材組合と川狩組合が提示した条件は、全文二十四条にもおよびますが、その内容を摘記しますと、

- 1. 調整池内の混木は、大井川電力が各材種別に區別して運搬すること。
- 2. 調整池内の沈木したものは、大井川電力でひきあげることに。
- 3. 大井川ダムと発電所放水口間の木材陸送は、十二日間に、行ふこと。

4. 陸送により生ずる川狩人夫の手際期間中、大井川電力は、大井川木材同業組合に、所定の人夫賃を支払い、全員の使役をすること。

5. 木材受渡しのため常備する係員の費用として、毎年六千円を大井川電力から大井川木材同業組合に支払うこと。

6. 線路が故障して陸送不能となつた場合は、大井川電力は必電用水全量を放流すること。

7. 木材流送の運賃費用は、すべて大井川電力で負担し、寸又川その他の支流の木材は、大井川電力が千頭または崎平まで異料で運搬すること。

8. 発電のため自然流量に増減があつて、流送に支障が生じた時には、大井川電力でこれを補償すること。

9. 大井川電力が堰堤(ダム)——放水口間の陸送を十二日間で行ない得なかつた場合は、残りの木材全部を大井川鉄道終点各駅まで無償で運搬すること。

10. 損害補償として、十五万円を準備すること。

以上十項目を見ただけでも、大井川の主人公が誰であるか明らかであるが、現在の貨幣価値を考へても、とても想像もつかない条件であつた事がわかります。

このあとの電力統制下の第二次世界大戦中の久野脇発電所が、国策会社日本発送電(株)によって建設されるのであるが、同様に補償問題が発生したが、国家総動員令の発令や、統制経済下で、日本発送電(株)が木材組合からの補償条件を受けつけず、むしろ、前記の大井川電力と約束した条件すら、やめる方向を打ち出して紛糾し、県知事の仲裁によって解決し、電源開発に伴う流木の補償ルールとして確立するのであるが、敗戦とともに電力統制が不必要になり、県の立ち会ひのもとで、森林組合、林産組合、川狩組合と

日本発送電(株)との間に協定が結ばれ、戦後の新しい条件が整備されることになりました。

大井川水系の発電所は、建設した電力会社から——日本発送電(株)——中部電力と移り変つていきました。又、日本発送電(株)は、九つの電力会社に分割吸収され、中部電力は大井川の水利権を一手に握ることになりました。

戦後の電源開発は、一九五〇年代に入つて、水力発電の開発ラッシュを迎えることになりました。中部電力になつてから開発されたダムと発電所は次のとおりです。

* 奥泉ダム・奥泉発電所	一九五六年完成	昭和31年
* 井川ダム・井川発電所	一九五七年	昭和32年
* 安間川ダム・川口発電所	一九六〇年	昭和35年
* 塩郷ダム・川口発電所	一九六一年	昭和36年
* 畑薙第二ダム・畑薙第二発電所	一九六一年	
* 畑薙第一ダム・畑薙第一発電所	一九六二年	昭和37年
* 赤石ダム・赤石発電所	一九六九年	平成元年
* 東保・西保ダム・二軒小屋発電所	一九九二年	平成四年
* 奥西河内・赤石沢・聖沢ダム・赤石沢発電所	一九九三年	五年

これらの発電所の完成稼働したときの大井川の利水率は、総利水の94.5%に達することになります。換言すれば大井川は、中部電力の専用河川に等しいのであります。

かつて電力の鬼といわれた松永安左衛門が中部電力の記念誌の序文で述べた「上流から下流まで呑み干すように開発された」という、大井川のもつ特徴は、ここにあるようです。

秘境寸又川と大井川水系の電源開発のあゆみを紹介しました。今、大井川は、ご案内のとおり、ダムによる貯水と、発電所の利水によって、予想もつかなかった大きな変貌



① 寸又川最上流部の水が  
 全て注ぎ込む千頭堰堤  
 清き流れであるが、推砂  
 推砂率97.7%日本一



をきたし、魚の住めない川となり、今年も鮎釣りも出来ま  
 せんでした。堆砂による河床の上昇と、ダム下流の河床の  
 低下や流入土砂の減少で海岸域は侵食後退して、  
 テトラポット（波消しブロック）の決となり、海亀の上陸  
 産卵を阻害し、沿岸漁業者をいためつけています。  
 大井川の環境改善と、昔の川の姿に戻す努力を続  
 けて、源流から海岸域まで、流域の人々の立ち上がり  
 を期待しています。

○次回は、山地崩壊により土砂に埋る支流・榛原  
 川を、案内する予定です。

② 千頭堰堤記念碑  
 中央、石積み上に自然石の  
 慰霊碑（見にくいかも知  
 りません）



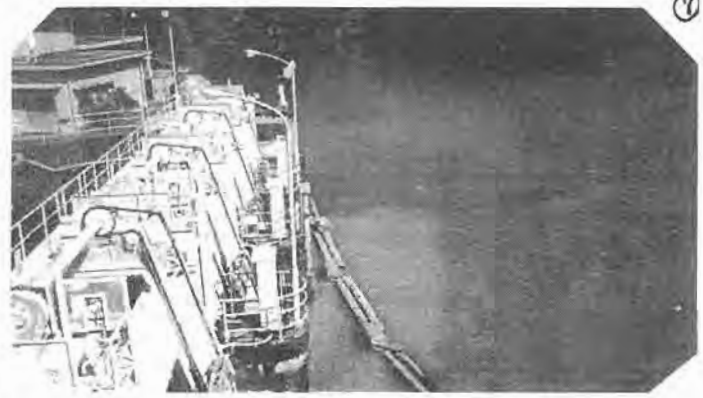
③ 千頭堰堤全景、昭和七年八月着  
 工、十年十月完工、当時東洋一、



④



④ 湯山発電所への取水口、  
 とにかく、美しい水である。



⑤



⑤ 大井川発電所への  
 取水口。

⑤、⑥、⑦は寸又川ダム、大井川本川の寸又川  
 ダムから本川の水が注ぎ込まれる。寸又川の  
 水は青く澄んでいるが、大井川の水は、濁っ  
 ているのが特徴。湖面で見分けがつくが、





番組制作プロデューサーが、視聴率の測定器を設置してある  
家庭に金品を贈って、自分の担当番組の視聴を依頼した、とい  
うのである。

このように金で視聴率をつり上げる背徳行為は、お堅いテレ  
ビ朝日の社員では、仮りに思いついても、とても恐ろしくなって実  
行出来ることではない。

この九年間、視聴率四冠王(ゴールデンタイム・プライムタイム・ノ  
ンプライム・全日)に輝き、視聴率トップを維持してきた民放  
第二号の日本テレビゆえに、追いつかれた上の一手段であったので  
はないだろうか。

普通の頭では考えつかないようなネタを開発し、既成概念に  
とらわれず、発想豊かな魅力ある番組の制作ができるプロデュー  
サーだからこそ、視聴率競争というしがらみの中で、世に言う  
買収という不正に手を汚したものと思う。

しかし視聴者やスポンサー、視聴率に生きる番組制作  
者、放送業者、放送広告業者への影響は大きい。また日本の放  
送史に、どのような扱いで残るだろうか。

実は平成八年(一九九六年)一月二五日「ふる里通信四十号」  
で「テレビ視聴率について」と題して解説した。

起こるべくして起こった視聴率至上主義のテレビ界とは  
いえ、前代未聞の買収事件が起こったのである。

犯してはならないテレビマンの操を傷つけ、われとわが手で下  
した自尊心への冒瀆、禁断の木の実を食ったことだけは事実  
である。

創造のエリートに墜落ぶりは、私のテレビ人生をうつろに  
した。

(二〇〇三、十一月 記)

第31回 静岡寮歌祭 平成15年11月29日、静岡市、フケ東海にて

渡邊實夫さんから、昨年初秋、静岡寮歌祭へのお誘いが  
ありました。旧制高等学校の寮歌も出身の皆さんが歌い  
合う催しで、東京で日本寮歌祭が始まって四十四回、静岡での  
お祭りも三十回をすぎました。どの様なお祭りかな?と出席  
させていたいただきました。とても素晴らしい会だったので、ご紹介  
したいと思います。(渡邊さんは済私高等工業学校(現静岡  
大学工学部)出身、左写真の皆さんと同席させていたたく)  
北は北海道、南は沖縄と、全国各地から青春時代の熱い  
血潮に燃えた想いを胸に母校の仲間が集まって、歌い、又、  
他高校の寮歌にじっと耳を斜け、あるいは口ずさみ、応援する  
様子はさすが、日本の半世紀を背負ってきた人達だな、と  
感心しました。



特に第一高等  
学校、第三高等学  
校、東京高等師  
範学校、など、文科  
の東大、理科の京大  
教育の筑波大、等々  
大平洋戦争前から  
戦中、戦後の日本  
を、良しはつけ、悪  
いにつけ、この人達  
の大勢の仲間が、  
動かして、現日本  
を築き上げてい  
るのだな、としみ  
み思いました。  
又、松本高等学

校(現信州大学)出身の小林さん(高柳出身)にもお目にかかれました。私は済私工業と松本高校の寮歌を歌わせてもらいました。といっても旗ふり係でした。

そんな中で発見した事があります。終戦前まで、現在の台湾や朝鮮半島、中国に日本が建てた高等学校があった事。寮歌や応援歌の歌詩も曲も素晴らしい事なのです。又、琵琶湖周航の歌が第三高等学校の愛唱歌であった事、北帰行が旅順高等学校(終戦により廃校)の寮歌であった事など、又、中曾根元総理大臣が静岡高等学校出身(左位)で、かつての静岡寮歌祭と盛り上げた事などは、

本物の嗚呼玉杯に花うけてや紅前ゆる丘の花、都ぞ彌生の雲紫に……を聴き、歳月を重ねながら国を思うパワーに接し、新たな元気を頂いた住き一日となりす。今も多くの人々に愛され歌われている二曲を載せます。歌ってみて下さい。

琵琶湖周航の歌

北 帰 行

一 われは湖の子さすうひの  
旅にあればしみじみと  
昇る狭霧やささなみの  
志賀の都よいささらば

二 私は緑に砂白き、

三 富も名譽も恋も

碓氷が里の乙女子は  
赤い椿の森蔭に  
はかない恋に泣くとかや

一 窓は夜露にぬれて  
都すでに遠のく  
北へ帰る旅人ひとり  
なみた流れてやまず

三 波のまにまに漂へば

五 いまは黙して行かん

赤い泊火なつかしみ  
行方定めぬ浪枕  
今日は今津か長濱か

なにもまた語るべき、  
さらば祖国わがふるさとよ  
あすは異郷の旅路

紙漉名人へつねにだまされる

ま え が き

作 櫻 井 勇 男

この面白いお話は子供の頃(大正・昭和)遊び、実際に見て経験した話です。今はテレビ、ゲーム、と遊ぶ事、食べる物、衣服と何一つ不自由はしていません。私は昭和の初め食べる物、遊ぶ道具、いたすらなど実際に見て共に考え、「知恵」を出して来ました。中でも面白い実話がコンピョーター(脳)の中に今だにこびり付き、時々思い出して独り言を言ったり笑ったりしています。

そこで、決心しました。これは書いて残そうと、人間の生活、知恵、遊び、食べ物など色々を面白く方言を使い短い文の中に集めました。何で遊んだか、何を食べたか、何が大事であったか、人間の興隆をすばり書き、人間味わいを書きまわした。どうぞ読んで、感じ、楽しませます事を切に願うものであります。

明治・大正・昭和と紙漉の清三さんと言う名人がいた。オタツに家があり、和紙を作り、出来た和紙を大きな紺風呂敷に包み、肩にかけよいらしよと行商に歩いた。

和紙は書画、ふうろ紙、神宮寺院の祭り等に使用した。中でもホイロ紙、茶袋、大カイ(茶袋の大きいもの)等には欠かせない重要な紙でした。又、百姓には正月の障子紙としてなくてはならない紙でした。

厳寒ともなれば時期到来、作業は原料のミツマタ・コウゾを使い、五右エ門釜という大きな釜で煮熱し皮をむき水洗い、ウソク皮が取れるまで、オタツ沢でアクを取り、きれいに洗い落とし葉の入った別の釜に入れ、煮熱する(スツクーラ)。ドロドロになった所で紙漉き工具へ移し、のり杖になったミツマタの皮をスキ具でパチャ、パチャと力を抜き紙漉をし、一枚一枚と板に張り付け、太



陽で乾かして出糸上がる、私もよく見に行つたものだ。この様な工法でつくられた和紙は虫も食わず丈夫であった。今でも私の家に残っているタノモシ講(昔の銀行)の大きな和紙の書き物も、大事にしている。見たい人はいつでも見に来て下さい。

そうして紙漉が行われた時、子供達は待っていた。とばかりに、材料を取ったミツマタの棒が冷えたら、そりの良い太い物を清三じいさんにもうり。「こらあ、みんな持つて行くてないぞ、そりやモヤ(たき木)にするの、だぞー」と怒鳴る。この小僧ども、早い者勝ちで、腰に二本指し、両手に二本持つて「ヤァー・ヤァー」と大声を出し、刃の代わりに振り廻して遊ぶ。ミツマタの棒は、きれいで軽くて、遊ぶにはもってこいだ。又、マンマツコー(ままごこ遊び)にも使った。今思うとあの頃が懐しい。物のない頃は工夫して作ったり利用した。紙漉じいさんは良いじいさんであった。じいさんには一つ芸があった。子供達が「〇〇つ」と教を言えは、その教だけ音を出した。大きく「と」言えは「ブー」と大きく出た。「へ」芸である。



ある日、夕方地蔵まいに來た人が集まり「向への大会」をやる。と言い出した。皆が賛成し、賞品はサバ一匹とどっかい口をたいた。ッさあ、集まれーッと言うと、周りに居たじいさん方を入れ全員で十二人集まった。見物人も大勢いた。

いよいよ調整が始まる。「ブー、ブー、ブー」とにぎやかだ。「いふべんに大きく出すと後が続かない」と独り言。やっつ調整が終り腹に手をあて押し込む人もいる。「イモを食って來たからオレの勝ちさ」と色々言っている。そこへもう一人来た人がいる。へ六助爺さんである。誰かが「爺さん調整は？」と聞くと、いきなりどえらいものを「ブバー」とやらかした。「これで良い」とへ六助爺さんは言った。子供どもも目をパチクリ



して真剣に見ている。それもそのはず、サバ一匹といえは昭和十年頃は誰も買えない、はすは高い魚であった。いよいよ大会が始まり二人ずつ向き合いになり交替でやらかす。審判も大変だ。音の長さを判定する若い青年であった。私の友人も大会に出た。大会もだんだんクライマックスに近づき勝ち抜いた四人が残った。競技のたんびに笑いと歓声がかかる。さすがに清三じいさんとへ六助じいさんは残っている。幸い友人も残った。だんだん暗くなつて來た。臭いへもあり、立の長いのもあり、スエるのもあり手であおっている。とても面白く音楽を聞いているよ。うだ、四人で争う競技は「ハシゴッペ」である。なかなかうサビ打ちが出糸す、へが出る合間が長くなるとためである。とうとう友人もウサビが打てず、サバは取れず、にきの毒であった。

いよいよ三人になった。ハシゴッペ競技の難関のウサビを打ちブーと音を出しハシゴを起すのである。ハシゴを起す所までへが出なくなり、一人が負け二人が残った。いよいよ決勝だ。こんどの競技はテランブ(ランブ)消した。今に見た事も無いへの競技だ。早く消した人が勝ちとなるぞうだ。大勢の人が見ている中で、「尻」を出してへで消すと言うのだ。試合が始まり二人が互いにへで消そうとするが、ランブの軸を長く出した為、なかなかな消えず、夜も十時すぎになった。火はポロボと動くがなかなかな消えない。引き分けかと思つた。「少し腹の調子が変だなあー」と首をかきつけて清三じいさんが「よし、今度は消すぞー」と言い尻をランブに近づけると、いきなりアケケと言つた。その瞬間「ブー、ブー、ブー」と出た。と同時にテランブがジュワンと消えた。「清三じいさんの勝ちさ」と審判が言う。小僧どもも「ワイ、ワイ消えたぞー」と騒いでいる。審判がジュワンと音かしたので、不思議に思い良く見ると、



「爺さん調整は？」と聞くと、いきなりどえらいものを「ブバー」とやらかした。「これで良い」とへ六助爺さんは言った。子供どもも目をパチクリ

妻は軸の上のつかかっているではないか、杖ありた。見物人も帰る。これは正味あったり——と笑って、ハセンであつたろうとサバを渡した。

夜も遅くなりサバを竹笹に通し、肩に

担いで鼻歌まじりで山道を家に帰る途中、笹からサバがするりと抜け落ちたとも知らず家に着いた。家の前ではあさんに「今日はへ又ケでサバサバしたよ」と大きな声で言つて竹笹を渡して腰抜けになった。……

じいさんへツネにはかされたとさ。——ほんにへのようなお話し。

——おわり——

「堀の内カルタ」からはじまって、昔話と三回に渡って桜井さんの奇矯をお送りしました。ほんにへのようなお話し、かう徳山の歴史まで広い知識から湧き出る話の泉は？、今度は何のお話でしょうか。

# おしんのモデルのふる里は 大井川上流部にあった

第67号に「おしん」のモデルのふる里は大井川上流の本川根町(平成十七年四月合併予定)だった……の記事は大反響でした。NHKテレビ開局50周年記念として夜七時半から再放送されていいますから、なおの事感心度の高い様です。「知っている人だよ」とか「静部の吊り橋のたもとに一杯飲みによく通つたものだった」など地元の人。「あの子守奉公で竹伐を下るシーンが山形の事ではなくて静岡の川根の事だったのですね……」とふる里本身の方が、前回に続くモデル丸山さんの手紙をお送りします。



## 洋服商の夫と結婚

人形町水天宮近くのレストランには女給が三十人もいて、よく出髪に行きました。あるとき、そのマダムが私に「お節子さん、お嫁に行かない？、いい人世話するわよ」といいます。レストランによく来る客に、いい人がいるから世話するというのがです。

「飲んべえだけ、五、六人も職人使っている、腕の立派な洋服商で、徳川様の出だよ。男っぴりはいいし」とさかんにすすめるので、私も二十、いつまでも一人でいられるものでもなし、一人でいると、人からいいこともいわれないから、「それじゃあ」と見合いをする気になり、今の主人のところへ縁づくことになったわけです。そして、神田の岩本町に新所帯を持ちました。



大木格之進のい  
丸山氏のハンサムな主人

主人は、松竹の新人俳優だったこともあり、女にもてたようです。徳川様の出というのもほんとうで、実家は、越後長岡の名家でした。それに、驚いたことには、夫にはじいやという人がついていて、大木格之進という名のその人がそれまで夫の世話をしていたらしいのです。

嫁いでも私は出髪をやめませんでした。じいやが、「奥さんの働いたお金は、生活費に使っちゃいけないよ」といつてくれましたが、夫は株をやる人で、ある日、出髪から帰ると、机の引出しに入りきらないほど、お札が入っているかと思つくと、翌日はすっからかんといいありさま。職人をかかえていることだし、私は出髪をやめるわけにはいきませんでした。

じいやはほんとうにいい人でした。「奥さんは、針持つんじゃないよ」といいますが、みんなが忙しく働いているのを見ると、出

髪で疲れて帰ってきて、針を持って手洗い、とうとうミシンかけも覚えてしまいました。

### ヤクザに仁義を切る

昭和九年ごろの話ですが、店の近所にヤクザがいて、「両親のいないかわいそうな子がいるが、五十円で買わないか」と持ちかけられ、そのせつ子ちゃんという九つの子を買いました。私は自分がいさゝかとき苦労したものですから、そういうかわいそうな子は見過ごしにできないのです。また私たち夫婦に子供が生まれな

いときでした。  
そのころ、夫が仕入れたラシヤ地がさばけなくて、たくさん反物が売れ残るようになりすした。私は知人の入れ知恵で、反物をメーター売りにして売ろうと、鶯鴨のとげ抜き地蔵の縁日に出かけました。その露店で売ろうとしたのです。

ところが露店というのは、ヤクザの縄張りがあつて、素人は組に入らないと商売はできません。そこで組に入る仁義を切る法を教えてもらつて、仁義を切り、ようやく露店を出すことができすした。自動車で積んできたラシヤを全部売って、大もうけしました。神田明神、千住、浅草と仁義を切つては、商売しま



丸山さんのヤクザから50円で買った子  
の女の子を、写真前列右端がせつ子  
の最初は怖か  
つたですが、その  
うち、いろいろ教  
えてくれるし、  
親切ですし、こ  
のときの経験  
は、あとになつ  
て、飯場の荒  
くれ男たちを

相手に飲み屋を聞いたとき、大いに役立ちました。ヤクザにからまれ、チンピラにあいくちを突きつけられ、それこそ障子の骨一本で命が助かったり、フスツと畳にドスを刺されたりしても、「殺すなら殺しなよ」と踏んばることができたのは、ラシヤ売りで度胸ができていたんですね。

### 飯場から飯場へ

昭和十年に長女が、十七年に長男、十八年には次女が生まれましました。あまり私が働くとき、夫が髪結いの亭主になりやうなので、十六年末からは、夫の商売を手伝っておりました。空襲で焼けたお茶屋、夫の実家の長岡へ逃げました。そこでも空襲にあい、戦後は、家族全員、大井川の上流の私の故郷で暮らすことになりました。

そこで私は、行商で生計をたて、村から村へ、重い荷を背負つて、二里、三里と歩きました。ある時、大井川の上流にダムができると聞き、「行商なんかやめて、ダム建設の飯場近くに飲み屋でも開いたら」とすすめる人がいて、トロッコで行くしかない山の中で、ラーメン屋、パチンコ屋、次いで飲み屋と、軒々と商売を変えながら、商売を軌道にのせていきました。

次々にダム建設の情報を得ては、飯場に飲み屋を開き、飯場の男同様流れるような日々が、つづきます。教えてみると、どれだけ店を開き、捨ててきたことでしょうか。

浜岡に原子力発電所ができると聞いて、この地にやってきて以来、この地が離れがたく、ここを最終の街処としようと思つています。

幸い、下の娘が婿と協力して、「お母さんのようにはできないかも知れないけど、一生懸命やってみる」と、民宿、スナック、喫茶店と忙しく働いてくれます。

夫とは、二十年も三十年も離ればなれの人生でしたが、



今年で結婚五十年になります。嫁いでからは、一銭一円の生活費も夫からはもらわず、私がいつも働いて、働きづめの人生でした。私はそのことで夫に大きい顔をしたことはないつもりです。今でこそ、憎まれ口もたたまさず、ついこの間までは、ケンカしても私が負けて、謝って、夫と夫として立ててきました。

こんな昔話を、今の若い人について聞かせて、どうしよう、とは思いません。時代がちがうのです。「私の時代はこうだった」と、私がいいたいのはそれだけでございます。

編集室より

—おわり—

いかがでしたか、二十余年前、NHK朝の連続テレビ小説で、「おしん」が放映され、当時空前の視聴率で日本中を席卷したモデルの一人が大井川上流部であった事がおわかりいただけでしょうか。

何と言っても強烈なシーンは、少女編の奉公先の苦勞でした。それが丸山さんだった……。幼は児が親元をはなれて後で川を下る……。東北地方よりもまだ豊かだったのではないかと想い込んでいた川根のイメージも吹き飛ばしてしまいい、何ともやる瀬ない気持ちになっちゃいました。

しかし、どの様な苦境にも負けず、ひたむきに生きぬいた丸山さんにエールを贈りますと共に、同年代を生きたいた女性にお母さん達にも家と守り、地域と守り、国と守ったお礼をしなければなりませんね。

今回、ページ又川見取図の中に丸山さんの生地、八木地区が載っています。又、10ページの電源開発の歴史で、大井川上流部のダム、発電所建設と丸山さんは、まづとかわりかあったのでしゅう……と想像しています。



茶どころ川根より。静岡県茶業会誌所発行 月刊「茶」読者のページより

★日本一 おめでとー

第57回全国茶品評会にて、中山根町が優秀な成績を収めました。煎茶手摘み部門で丹野さんが優等賞、一等賞、三等賞までに六人が入賞、そして産地賞を受賞しました。おめでとーございます。

とかく暗い話題の多い中、この知らせは茶生産農家はかりでなく、町全体にとっても、待ちに待った嬉しい知らせでした。これをきっかけに茶産地川根が、もっと元気になっていくと思えます。

★ちよつと昔の川根茶産地は、

ハハー。お茶の旨さに噂を乗せてーエー

流す天下の大井川 サアノサア

あの娘、背中の娘 茶摘みが上手

それに笑顔のエーコリヤ また可愛い、

さあさ手拍子 シャンシャンと打って

景気上げよか 中川根 中川根

中川根音頭は、確か昭和四十年頃、茶産地中川根がヒても元気な時代に生まれました。夢もほろかな山嶺線こえてと、林道南赤石線も信州遠山郷に近く、拡大は開発計画も立てられました。

それから何年か、天皇后授与や農林水産大臣賞など輝かしい実績のもと、先進茶産地として、全国から研修に来たり、茶生産農家の皆さんが、誇りをもって、茶業に励んでおりました。

人情深い先賢者の皆さんは、茶畑から製茶技術まで、熱心に指導した結果、全国に川根茶を手本とした産地

ができてきた。分家による本家の衰退とまではいかなかったよう  
ですが、川根茶産地にとっては頭の痛いところでした。が、川根  
地方独特の風土、気象条件はなかなか真似のできるものでは  
ありません。それと、茶農家を継いでいく子孫にも恵まれ、  
正しい後継者も育っています。

★ずーっと昔の川根茶産地は、

川根地方には先住民も居ると思いますが、いろいろな人  
達が、様々な時代に移り住んできたようです。特に戦いに敗  
れて逃げ込んできた人達は、文化や生活様式も持ってきて  
くれたようです。

いつの頃かは定かではありませんが、地名に「美作の国」  
(現岡山県)から一族が移り住み、庄兵衛(美作氏)を襲名し  
て、地名の名主を務めています。この美作氏がお茶の技  
術を持って来たのではないかと、とも考えられるふしがあり  
ます。

江戸時代、米の生産が殆どなかったこの地方では、年貢に  
お茶が納められていました。すでに茶産地として営農し  
ていたのか、それともお茶が薬効効果等希少価値の高  
い物ゆえの施策だったのか、と想像しています。

同時代の文化文政年間、遠州駿河の百有余の村々が、お  
茶の取引の改正を求めて、連判で訴訟を起こします。当  
時何百軒あったかわりませんが、「江戸の茶問屋を二十鋪  
のみとする」という御達しに抵抗しての蜂起で、文政の  
茶一件として歴史に残っています。川根地方には、壺方  
訴状と茶仲間訴状が残されていて、温厚な土地柄にも  
似ず、お茶をめぐって生産者と流通業者が争ったこと  
に、特に生産者側には、時代を越えた悩みがあったことを  
興味深く感じます。

★香りと彩色を飛ばせたい

春になると香しい香りが、風に乗って流れてきます。

奥山に咲く花の香りもあります。茶時の製茶工場の  
香りが、とてもいい香りです。

子供の頃はもっと強く感じたのですが、近年は香りが  
薄く感じます。年を重ねて嗅覚が鈍ったこともあり、  
お茶自体の香りが少なくなったと言います。あの香  
りは煎茶で味わう時の香りと共通しているのかも知れ  
ないと思います。

季節を問わず川根には彩色があつていい所です。特に  
春は芽吹きや花の淡い色彩が何とも言えない感じ。新  
茶の畑はまさに生命の源です。この頃、ちよつと気にな  
ることは、茶畑の色と煎茶を入れた色です。川根茶は  
煎じた時、山吹色が良く聞こえます。が、この頃は、緑  
色になつていくようです。

夏も、秋も、冬もそれぞれその彩色をもっています。この  
ような環境に生活している事を私自身贅沢に思います。

——中略——

★大井川に豊かな流れを

川根茶産地で、今、一番ほしいのは大井川の豊かな流  
れです。水は生命の源です。木枯し吹きぬく寒い、冷  
朝、川面から水蒸気が湯気の様に立ちのぼり、川霧  
となつて辺りを真っ白に包む。あの冬の朝の光景がなつ  
かしい。夏の炎天下、川風が涼を運び、生き物全てが  
どれほどに癒された事だろう。

山が、樹木が、送る贈り物を、豊かな流れに乗せて  
あちこちの川辺をうるおい、海に届けたいですね。その  
時は、もっと深みのある川根茶が生まれましょーう。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 千円 200円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行(3ヶ月ごと)を予定しています。

購読料は郵便振替口座をご利用下さい。(1年分800円)

購読が切れの方には振替用紙を同封致しますからご利用下さい。

もし、購読を止めたい時や、住所変更のありも、是非ご連絡下さい。

郵便振替通知票番号

00870-4-81556

発行責任者、〒428-0913

静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6

小沢節子

TEL. 0547-56-0015

FAX 0547-56-0020

「次世代に伝えたい中川根」=冬の表情=町で発行した2003年カレンダーより



赤いポストのある駅 撮影場所:下泉地区

大井川鉄道下泉駅前、小雪の舞う正月。ちょっと昔型のポストも、中川根型電話ボックス。撮影者土屋陸作さん(浜松市)



クリスマスイブ 館内撮影:下泉地区

「なにかかわねウッドハウス おろくほ」も開業10余年、たくさんのお客さんが、温かさと静けさを求めて訪れてくれました。

読者の皆様も是非  
寄稿していただい  
てより充実したふる  
里通信にして行きな  
いと思えます。特に  
母校の思い出などお  
寄せいただければう  
れしいです。今年  
の冬は寒いので  
すから、どうぞ風邪  
など引かない様に  
お願いします。

新しい年を迎えま  
したね。六百年に一度の火星大接近もありましたね。その当時南の空にひときは目立つ赤い星を見る時、火星は戦争星だから...と、世界も個人の心も、平穏なる事を願いました。今は、地球から遠ざかって、すうみり目立たなくなりかけた。変えて、金星が、よりウスが、木星が一役と輝きを強くします。ウツロハウス横の小てな天文台へ是非来てみて下さい。お待ちしています。

平成十七年三月末を目指して  
中川根町も本川根町との合併が進んでいるようです。新しい町名の公募もはじまりました。何という町名になるのでしょうか。いづれにしても、中川根町の名前は合併で終わりになる様な気がします。  
その様な事を考えているうちに、ふる里通信も、「この一年の内に、ふる里の歴史や文化、自然等々集大成をしないではいけないのでは」と考えました。合併までに80号にしたいと計画していましたが、無理ですから、今回より発行ページ数をふやしました。